サミット財務大臣会合の会議運営について

大臣官房秘書課財務官室
大臣官房文書課広報室

1. はじめに

6月13日（金）～14日（土）の二日間、サミット財務大臣会合が、大阪国際会議場（グランキューブ大阪）等において開催された。

サミットは首脳会合のほか、いくつもの閣僚会合があり、昨年5月に首脳会合が北海道洞爺湖に決定となった際に、財務大臣会合は大阪での開催が決定され、それ以降本格的な準備が始まった。大阪での会場選定に当たっては、1995年のAPEC大阪開催の際に新造されて以来国際会議に使用されていない大阪城公園内の大阪迎賓館を使うことも検討したが、結局、地元の意向を踏まえ、大阪国際会議場での開催となった。

サミット財務大臣会合の開催に当たっては、大阪府、大阪市、地元経済界及びそれらによって構成される2008年サミット財務大臣会議大阪推進協力委員会といった地元の方々に大変なご協力をいただいた。この場をお借りしてまず御礼申し上げたい。

8年に一度のサミット議長国として会議を主催することは、準備・運営に多大な労力を要するものである。とはいえ、普段は、欧米諸国から地理的に遠い我が国の場合、いわばアウェーでの戦いを強いられて、大臣以下、長時間のフライトと時差に苦しみながら、各国と丁々発止渡り合っていることを考えれば、ホームでの会議は、長時間のフライトがなく、時差もないことから、非常に有利であり、かつ、議長国として会議の方向性と結論に大きな影響力を持てるという点で、ホスト国としての大変さを補って余りあるものがある。またG8の他のメンバーに、心を尽くしたもてなし付きでということではあるが、アウェーで戦う普段の我が国の苦労を分かってもらう良い機会でもある。

会議の内容・成果については、既に別稿で報告されている通りであるが、本稿では、会場設営等いわゆるロジスティクスに関わった立場から、会議の雰囲気をお伝えしたい。当日の模様を振り返った後、広報、関連行事、そして事前準備について触れる。

2. 当日の模様

6月13日（金）

朝―準備会合

当日は、朝から事務方による最終の準備会合がぎりぎりまで続いた。財務サブ・シェルパ注会合に始まり、途中からは、並行的に財務官レベルで、大臣会合での議論・採択に向けて、コミュニケ文書の最終調整が行われた。

午後―バイ（二国間）面会

サミット財務大臣会合の機会を利用し、額賀大臣は、スワン・オーストラリア財務大臣、ストロス・カーン IMF（国際通貨基金）専務理事、ポールソン米財務長官、バユク EU 議長国スロベニア財務大臣（財務大臣会合終了後）と面会された。

なお、このほかにも、同会合に続いて6月15日・16日に韓国・済州島で行われたアジア欧州会合（Asia Europe Meeting: ASEM）財務大臣会合の際、大阪でのサミット財務大臣会合に参加したスラポン・タイ財務大臣、ミロー独大蔵次官、ラガルド仏経済・産業・雇用大臣と面会していることを付記しておきたい。

注 サミットでは、会議の準備にあたる首脳の個人代表たるシェルパの他に、それぞれ財務大臣会合、外務大臣会合を通じてサミットに貢献する財務サブ・シェルパと外務サブ・シェルパが存在する。財務サブ・シェルパは、我が国では通常、国際局次長が務めている。

ポールソン米財務長官とのバイ面会

16：45―気候変動共同記者会見

今回のサミット財務大臣会合においては、気候変動問題が大きなテーマの一つであった。気候変動によってより影響を受けるのは貧困国であるが、これらの国々は、温室効果ガスを削減するための取組みや、気候変動の影響を小さくするための取り組みを行う資金的余裕がない。こうした貧困国が自国の開発ニーズに整合的な形で気候変動に取り組むことを支援するため、世界銀行に「クリーン・テクノロジー基金」と「戦略機構基金」の2つの基金からなる「気候投資基金」を設立することになっていた。我が国は、米英とともに、この基金設立を唱えており、サミット財務大臣会合の開始前に、当基金の重要性を訴え、それへの支持を求めるため、異例ではあるが、日米英3カ国と世界銀行で共同記者会見を行った。直前まで英国が記者会見に参加できるか分からず、準備は慌ただしいものとなった。

17：30―地元主催歓迎レセプション

今回のサミット財務大臣会合における準公式行事として、会合の皮切りとなったのが、

地元（2008年サミット財務大臣会議大阪推進協力委員会）主催の歓迎レセプション。各国大臣等をはじめ約400人の参加を得て、リーガロイヤルホテル3階の光琳の間で行われた。

福娘によるお出迎えや子どもの和太鼓演奏、各国大臣等と地元参加者との歓談の後、慶事の際に演じられることの多い文楽の「二人三番叟」（人形遣いは三世桐竹勘十郎氏）を手始めに、地元代表の橋下大阪府知事からのご挨拶、G8議長として額賀大臣のご挨拶に続き、G8財務大臣及びアウトリーチ・ディナーに参加する大臣等に法被を羽織ってもらっての鏡割りや記念品贈呈、平松大阪市長の発声の下で枡酒による乾杯。短い時間であったが、大臣達は、大阪の伝統芸能と日本の文化に触れて、会議開始前のつかの間の一時を楽しまれているようであった。

歓迎レセプションでの鏡割り

18：50―大阪城での記念写真

レセプション会場からは、4台のバスで、記念写真撮影を行う大阪城へ移動した。

梅雨時であり、過去の6月13日の降水確率が50％というデータがあったため、準備段階では雨が心配されたが、当日は快晴とまではいかなかったものの、雨を全く心配しなくて良い天気に恵まれ、大阪のシンボルである大阪城を背景に無事写真を撮ることが出来た。西日に大阪城が映えて写真写りは上々であった。

参加した各国大臣等も、リラックスした様子で、集合写真の後は、カメラマンからのリクエストに応じて、気軽に個別の写真撮影に応じられていた。2分程度の写真撮影の後、バスへの各国大臣等の戻りもスムーズに行われた。

カメラマンからのリクエストに応じる額賀大臣とラガルド仏経済・産業・雇用大臣

大阪のシンボルをプレス機会に含めることに、地元は概ね好意的であったが、警備との関係から、警察庁、府警とは累次に亘る協議が必要であった。また、写真撮影のために、当日は、大阪城公園内の一部を立ち入り禁止としたほか、広範囲の交通規制が行われた。地元の皆様のご理解とご協力にこの場を借りて感謝申し上げたい。

なお当日（13日）朝、当初直接夕食会場（太閤園）へ向かう予定だった各国次官等の乗車したバスが、急遽、大臣一行乗車バスとともに大阪城に来ることになるという変更があったものの、警察当局と協力して、事無きを得た。

19：10―アウトリーチ夕食会

ブラジル、ロシア、中国等を始めとした新興市場国の台頭により、世界の直面する様々な課題に取り組むためには、G8 以外の国々との対話が重要になってきており、G8 会合においては、その時々の議題に応じ、G8 以外の関係国を招く（G8 の外に範囲を広げるという意味で、アウトリーチ“outreach”と呼ばれる）ようになってきている。今回の財務大臣会合では、石油や食料などの一次産品価格の高騰や金融市場を含むマクロ経済と気候変動問題が、開発と並んで主要議題であったため、オーストラリア、タイ、ブラジル、中国、韓国、南アフリカの財務大臣等と、アジア開発銀行黒田総裁、金融安定化フォーラムドラギ議長、国際エネルギー機関（International Energy Agency：IEA）田中事務局長を招待した。

夕食会の会場は、厳しい議論を交わす合間に少しでも日本情緒を味わっていただくため、関西財界の雄、藤田男爵の邸宅であった太閤園淀川邸を選んだ。大阪城での記念写真撮影後、太閤園に着いた大臣達は、日本庭園を通って、しばし日本情緒に触れてもらった後、

太閤園での夕食会の様子

靴を脱いで夕食会場に上がっていただいた。欧米人は外で靴を脱がないせいか穴の開いた靴下を平気で履いていることもよくあるため、事前に各国に何度も注意喚起してあり、靴を脱ぐことに驚く方はいなかった。また、幸い「穴の開いた靴下」は見受けられなかった。

時間が押していたため、予定していたカクテルの時間は無しで、全員が揃い次第、夕食会を開始。原油や食料などの一次産品価格高騰からのインフレ懸念、米国のサブプライム・ローン問題に端を発する金融資本市場の混乱の実体経済への影響といったマクロ経済の喫緊の課題について、率直かつ真剣な議論が行われた。

ただ、当日到着した国も多かったためか、長旅と時差で、欧米から参加している大臣達はかなり疲れておられる様子であり、箸を動かす手が滞りがちになる姿も散見された。

アウトリーチ夕食会では、座興として、全参加国の食材をどこかで使い、それを食後に議長を務められた額賀大臣が紹介された。日本の食材を中心に、和食という基本は崩さずに、各国の主な食材を使ったわけであるが、額賀大臣からの種明かしに対する反応は様々であった。

例えば、米国は、オレンジを自国の食材として使われて、すこしがっかりした様子で、これは時節柄、US ビーフを使って欲しかったのであろうか。日本の代表的な食材として出した神戸牛と並べて、食べ比べてもらえばよかったのかもしれない。

対照的に喜んでいたのが、EU 議長国として参加したスロベニアの大臣で、G8 財務大臣会合終了後の額賀大臣との面会において、

スロベニアの塩を使ってくれたことに対して謝意を表明し、アドリア海に面したピラン塩田の塩は、とても素晴らしいものであると強調していたそうである。

フランスについてはフォアグラを使ったので、ワインはイタリア産を提供したのだが、フランスのラガルド経済産業雇用大臣は、愛国精神を発揮されたのか、自国産でないワインに手をつけなかった。デザート・ワインだけはウェイターから「お国のワインです」と言われ、銘柄を確認した後、結局飲まれたようである。

なお、デザートのメロンには茨城県産メロン（年間出荷額全国一位）を提供した。

また、「藤の間」と「鶴の間」で提供した随行員向けのブッフェでは、天ぷらや日本そば等に加え、大阪名物として大阪寿司、たこ焼き、大阪風お好み焼きも並んでおり、各国随行員にも総じて好評であった。

夕食会場を出る際には、ワーキング・ディナー参加者33名に加えて、各国原則2名まで認めた随員、各国毎に2名ずつ付いた日本側警護官、各国が自ら連れてきた警護官等、総勢100名以上が狭い廊下を通って玄関まで行き、そこで靴を履いて外に出ることになったため、混乱が心配されていたが、事前の手順の確認と準備のお蔭で、大きな混乱はなく、皆スムーズに帰りのバスに乗り込んだ。

夕食会後―準備会合は続く…

ホテルに着いたのは、22時近くになってからであるが、事務方は財務官レベルで会議を再開し、コミュニケの案文をめぐって、文字通り真夜中まで議論が続けられた。真夜中の会議では、コーヒーの消費量が上がったようである。

6月14日（土）

7：45―アウトリーチ朝食会

国際会議の朝は、早い。

超多忙の大臣達の時間を最大限有効活用するために、朝も、ワーキング・ブレックファーストという形で、朝食会を兼ねた会議が入ることが多い。今回のサミット財務大臣会合も例外ではなく、7時45分から、気候変動問題を議論するためのワーキング・ブレックファーストから一日が始まった。その直前には、最終的な議事進行の確認のため、7時から額賀大臣の勉強会が行われたことは、言うまでもない。

議題であった気候変動問題への各国の関心は高く、自国における取組み、また、国際的な取組みに対する基本的な考え方を中心に、G8諸国とアウトリーチ国との間で、活発な議論が行われた。

朝食としては、厳選した旬の食材を使った洋食を供したが、一晩休んで少し疲れが取れたのか、大臣達は食が進んでいるように見受けられた。

早朝から活発な議論が行われたアウトリーチ朝食会

9：30―G8 本会合

朝食の後は、場所を移し、G8 メンバーだけの会議に移行した。世界経済、気候変動、開発が主要議題であったが、特に世界経済の現状と見通しについて、突っ込んだ議論が行われた。

これは今回の財務大臣会合が、石油や食料を含む一次産品価格が大きく高騰し、インフレが懸念される一方、昨年夏以来の米国サブプライム問題に端を発する金融市場の混乱とその実体経済への波及で主として先進国の成長減速が懸念されている中で行われたためであり、経済の現状認識と見通し、また、政策対応について率直かつ真剣な議論が闘わされた。

環境に配慮し、今回の財務大臣会合は、額賀大臣のイニシアティブで、クールビズでの開催となったが、室内とはいえ、高温多湿の気候を感じるのか、はたまた、長旅の後で喉が渇くのか、会議場にセットしておいた飲み物のテーブルから、コーラを取る参加者が多く見受けられた。そもそも、コーラは、発祥の地である米国の参加者が大変好むことが 2 月に東京で開催した G7（主要 7 カ国財務大臣・中央銀行総裁会議）の際に判明したため、多めに用意したものであるが、美食で知られる某国の大臣を始め、他の多くの参加者も盛んに飲んでいたのが印象的であった。

G8 本会合

12：40―記念植樹

本会合終了後、大臣達に国際会議場 1 階プラザに降りて頂き、サミット財務大臣会合大阪開催を記念して、大阪府の花木である梅（紅・白一本ずつ）の苗木の植樹及び記念写真撮影を行った。地元代表である大阪府知事のご挨拶に引き続き、スコップや手袋を大臣達に渡して植樹を行っていただいた。G8 財務大臣の中には、大目に用意されていた盛土を最後まで残さずにスコップで運び、長時間シャッターチャンスを提供してくれるサービス精神旺盛な方もおられ、会合での厳しい表情から一転して、笑顔溢れる雰囲気の中で、今回の会合を締めくくることが出来た。

本会合を終え和やかな雰囲気で行われた記念植樹

13：32―議長国記者会見

本会合の最中にも、コミュニケ文言が変更となるため、本会合終了間際から記者会見までに配布するコミュニケの準備作業が行われる。毎度のことであるが、記者会見開始のタイミングとのにらめっことなる。2 月の G7

の際にはプレスセンターでのコミュニケの配布の際に相当な混乱が生じたので、念を入れて数箇所に分散して配布した。このため、コミュニケの配布についてあまり混乱はなかった。記者会見場は、コミュニケを配布した時点ではまだ埋まりきっていなかったが、配布後数分たつと3階のプレスセンターから続々と記者たちが会見場に入ってきた。

ほぼ時間通りの13時32分に会見は始まった。まず、議長である額賀大臣よりコミュニケの内容を含め会議の概要についての発言があり、その後質疑応答が行われ、予定通りの30分間で記者会見は終了。G8の公式行事はこれで無事終えられたのである。

公式行事を締めくくる議長国記者会見

3. メディア関係

サミット財務大臣会合では、多数のメディア関係者が取材に携わることが見込まれたため、会合のロジとは別に、こうした記者を含むメディア関係者の受入体制の検討が必要であった。2月のG7では、テレビ中継等に必要なスタッフを含めたメディア関係者が約360名来場しており、サミット財務大臣会合でもほぼ同数の来場者数を見込み、準備を始めた。

広報室のスタッフのほとんどが2月のG7でこうしたメディア関係の対応を経験していたこと、また、その際の反省点を踏まえた対策も立てたこと、さらには、近畿財務局などから強力な応援を得られたことから、全体として混乱はなく、極めてスムーズに進められたと考えている。実際、会合の後に参加したメディア関係者からお礼のメールが多数届いており、その中で問題を指摘されることはほとんどなかった。このように、メディア関係の対応を成功裏に終えられたことは広報室一同本当に喜ばしいことと感じた。

(1) 記者登録

2月のG7やその他の国際会議と同様に、会合の取材機会への参加やメディアセンターへの来場には、事前登録を必要とした。今回は、G7の際よりも長く、4月28日から5月20日までの期間を記者登録の期間として設定し、この間に特設ホームページを通じて登録を受け付けることとし、同ページでの登録後、所属社からの在職証明書の写しを事前にメール等で送信してもらって、当日に原本と引換にプレスバッジを交付することとした。2月のG7での登録方法をほぼ踏襲したこともあって、特段の混乱

記者へのID交付の様子

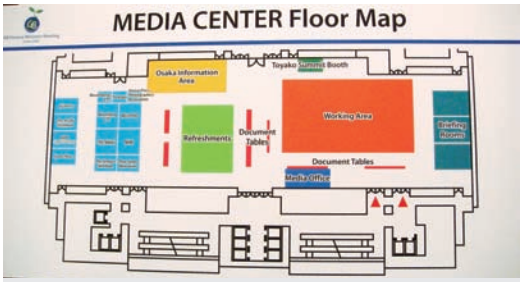
はみられず、本人確認も順調に進めることができた。2月のG7への取材参加者にEメールで周知を行ったが、他にも同種の会合が同時期に開催されていたこともあるのか、期限後に登録してきた記者はあまりなかった。記者登録の総数は784名、うち447名（約57%）が来場した。

(2) プレスセンター

2月のG7では、プレスセンターが狭く、席数が十分に確保できなかったことから、後日多数のクレームが寄せられた。本会合では、3階イベントホールを全て報道関係者向けに使用することが可能であり、G7の時と比べて約6倍のスペースを確保することができた。そこで、約300席の自由席を設けると共に、希望する報道機関に対しては、個別ブースを設け無償での使用を認めることとした。期間中は自由席はほとんど埋まっていたものの、足りない状況ではなく、過不足なしといったところであった。

また、大阪推進協力委員会による「大阪PRブース」や北海道による「洞爺湖サミットブース」を設置いただいたが、特に大阪PRブースで「大阪の食のおもてなし」と称して提供されたうどんやたこ焼きといった、地場の軽食や呈茶は記者に大変好評であった。

橋下府知事が「大阪の食のおもてなし」をPR



プレスセンター内に設置されたフロア・マップ

プレスセンターの様子

会場周辺には食事をする場所が少ないため、サンドイッチ、おにぎり、カップ麺、デニッシュ、アイスクリーム等を提供したが、こちらもなかなか好評であった。

プレスセンターの開場時間については9時から22時の予定としていたが、時間がきても無理に追い出すことはせず、記者の方々の作業が終わるまで待機していた。13・14日両日とも、最後まで作業されていたのは、イタリアからの記者の方々であった。

各国大臣等も時差に悩まされていたようであるが、外国からやってきた記者の方々は、時差に加え、本国での原稿締切時間にも悩まされていたようであった。

(3) 取材機会の設定

国際会議では、会議冒頭に着席風景のカメラ

撮影の機会や、集合写真（ファミリーフォト）の場を設けることが通例である。

いずれの取材機会も警備上の観点から代表撮影とし、代表者の選定については関西写真記者協会と在日外国報道協会に調整を依頼し、両協会に快く引き受けていただいた。事前に取材のリストを提供してもらい、代表取材者用のIDを別途発行したこともあって、各取材機会で混乱は生じなかった。

今回の会合では、アウトリーチ夕食会が太閤園で実施され、その集合写真を大阪城内で撮影することとされたため、プレスの動線についての検討を要した。検討の結果、大型バス1台を使用して、大阪城での撮影者と太閤園での撮影者を一括して国際会議場から輸送し、太閤園での撮影終了後、大阪城経由で国際会議場へ帰還することとした。移動の時間帯には地元主催歓迎レセプションも行われており、取材機会が複数箇所で設けられたために、広報室も同時に複数箇所での記者制御を担当しなければならず、一番の関門であったが、プレスの方々のご協力や事前の警備当局との詳細な調整もあり、混乱なく終えることができた。

14日に行われた各国大臣等の記者会見に関して、各会見場への記者の移動はフリーとした。これは2月のG7の際、会見場をセキュリティエリア内に設置せざるをえなかったため、記者の移動を制限したところ、当日にかなりのクレームを受けて対応を一部変更せざるをえなかったことから、今回は当初から記者のアクセス可能な場所に会見場を設けたことによるものである。そもそも国際会議場がサミットを想定して建設されたということもあって記者の動線も非常によく考えられており、混乱はなかった。

ヒヤッとした事例を1つだけ挙げれば、14日朝に額賀大臣がホテルから会場へ入るシーンを撮影することとなっていたが、13日深夜に会場入りの時間が変更されて早まったことを広報室職員が誰も知らず、当日朝になってたまたま知ることとなった。かなり慌てたが、取材者の集合時間を早めに設定していたこともあり、撮影には十分間に合った。国際会議での取材者の集合時間は早くするに越したことはないと実感した瞬間であった（プレスは待たされることには慣れていて長い待機時間それ自体はさほどクレームとならないが、取材機会に間に合わないような事態となると、クレームでは済まなくなる。）。

4. 関連行事

サミット財務大臣会合のプレイベントとして、下記のとおり、いくつかのシンポジウムが開催された。

（1）環境と民間セクターの関与に関するシンポジウム（3月26日）

まず、本年3月26日に財務省・世界銀行・国際金融公社（IFC）・アジア開発銀行（ADB）・アジア開発銀行研究所（ADBI）・国際協力銀行（JBIC）の共催、金融庁の後援で「環境と民間セクターの関与に関するシンポジウム」が東京で行われた。遠藤財務副大臣からのご挨拶に続き、内外の官民金融機関から環境問題に関するそれぞれの取組み状況を紹介いただき、関心のある方々とともに幅広い議論がなされた。

（2）財務省・IMF 共催プレシンポジウム（5 月 20 日）

続いて、5 月 20 日に財務省・国際通貨基金（IMF）アジア太平洋地域事務所の共催でプレ G8 財務大臣会議シンポジウム「金融混乱と世界金融システム」が東京で行われた。額賀財務大臣のご挨拶に引き続き、近時の金融市場の混乱から生じる諸問題について、学界、民間金融機関、政府関係機関の関係者間で、短期的および長期的視点から議論がなされた。

学界、民間金融機関、政府関係機関の関係者間で、充実した議論が行われた

（3）地元主催シンポジウム（5 月 26 日）

更に、5 月 26 日には 2008 年サミット財務大臣会議大阪推進協力委員会の主催（財務省・日経新聞の後援）で、シンポジウム「2008 年財務大臣サミットに向けて」が大阪国際会議場で行われた。平松大阪市長のご挨拶に引き続き、遠藤財務副大臣から「2008 年サミット財務大臣会議の主要テーマと日本の役割について」の基調講演があり、更にパネルディスカッションで「世界経済はどこに向かうのか」をテーマにグローバル社会の進展がもたらす課題や、日本とりわけ大阪の果たすべき役割などについて活発な意見交換が行われた。

同委員会ではこのほかにも児童・青少年向け、大阪府民向けに種々のイベントを開催し、サミット財務大臣会合開催に向けた機運を盛り上げていただいた。

5. 事前準備

サミット財務大臣会合は、首脳会合に準ずるものとして、警護面一つをとっても相当レベルのものが要求されるため、開催地が大阪と決定された昨年の 5 月以降、地元、警察当局、関西国際空港といった関係先と協力しつつ、周到に準備を進めてきた。

（1）人員体制の構築

サミット財務大臣会合については、2 月の G7 と比べて、地元（2008 年サミット財務大臣会議大阪推進協力委員会、大阪府、大阪市）、警察当局（警察庁、大阪府警）、関西国際空港の各部署といった関係調整先が多く、また会議以外の行事も行われるため、開催準備のための膨大な事務が発生することに鑑み、財務官室の人員体制の強化が不可欠であった。

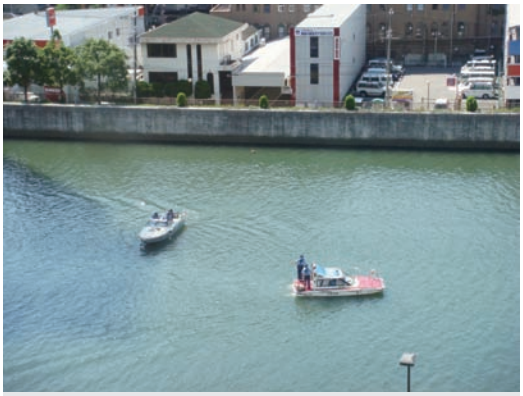
元々の財務官室メンバーは室長以下 9 名であったが、サミット準備の要員として本年 1 月に補佐 1 名、4 月に東京・大阪税関から係員 2 名、5 月に財務省国際局から係員 1 名が財務官室に追加的に配属となった。他省では閣僚会合準備に特化して相応の体制をとっているのに比べると、財務省は、他の国際会議出張等の準備・対応を含めた通常業務をこなしながらの作業となり、上記増員でも必ずしも人数は十分とは言えない状況であったが、増員となったスタッフがそれぞれの経験・能力を生かして大い

に活躍してくれたため、大きなハプニングもなく財務大臣会合を終えることができた。

また、前年のADB京都総会の経験も踏まえて、近畿財務局も会場の検討段階から一体となって準備に当たったほか、会議期間中は広報相談室職員や若手職員を広報関係の応援に出してもらい、プレスセンターや各取材機会での業務に従事してもらったことは、大きな助けとなった。

参加国・機関との関係では、過去の大型国際会議の例を参考にしつつ、今回全ての参加国・機関に国際局および大阪・神戸税関の職員を中心に、リエゾン（liaison：連絡役）をつけた。各リエゾンは、担当国・機関と密接にコンタクトをとり、車両や登録関係の事務や現地での連絡・調整をしてくれたことから、スムーズな会議運営を行うことができた。

リエゾン以外にも、財務省の若手や神戸税関の職員等に現地で様々な形で手伝ってもらったことを付言したい。



会場前の堂島川でも府警による河川警備が行われていた

交通規制のため各国大臣達が移動した際には、高速道路はほぼ貸し切り状態であった。会場等についても周辺区域を含めた広範囲の警備体制が敷かれた。市民の皆様にご迷惑をおかけしたと思うが、そうした厳重な警護・警備体制の下、幸いにも要人や会場を狙った犯罪行為もなく、会合を無事終えることができた。ご協力に深く感謝申し上げたい。

（2）警備

今回のサミット財務大臣会合では、警察庁での検討の結果、外務大臣会合同様、2000年の九州・沖縄サミットの例に倣って準首脳級の要人警護・会場警備を行うこととなり、また、拡声器の使用を制限する静穏保持法も適用されることになった。こうした点は、同じく主催国として準備に当たり、また参加大臣等が重複する2月のG7と大きく異なるところであった。

具体的には、例えば、要警護対象となる各国大臣等の一行は、到着の際に、空港ビルを通らずに、機側から地上に降りて、そこから直接車列にて空港外へ出る方法をとった。また、車列には何台も警護車両が含まれていた。さらに、

（3）国際会議場

本会合会場となった大阪国際会議場は、大阪・中之島にある、故黒川紀章氏の設計による立派な建物で、屋上にはヘリコプターも着陸できる。開業が2000年4月であるため、まだ新しくきれいであり、これまで種々の国際会議が開かれているだけでなく、時には有名歌手のコンサート会場にもなっている。大小様々な会議室が複数存在するため、突発的に様々な組み合わせで大臣級の会議がセットされることもあるサミット財務大臣会合の会場としては、非常に便利であった。

サミット財務大臣会合当日は、アウトリーチ朝食会を最上階12階の会議室の一つで行い、

本会合を同じく12階の特別会議場で行った。プレス関係では、3階イベントホールにプレスセンターを設置し、6階小ホールにて額賀大臣の議長国記者会見を行った。また、G8財務大臣等に対しては、10階の一部の部屋を分割し、控室兼バイ面会用の個室を提供するとともに、5階～8階の会議室を各国記者会見場として提供した。

正式な会議自体は、6月13日（金）夜のアウトリーチ・ディナーからであるが、8年に一度のホスト国として参加国を迎える立場から、我が国の事務方は、その殆どが前日の夜中までに大阪入り。事前の最終打ち合わせと、会場の最終チェックが続けられた。

その際、直前に決まった気候変動共同記者会見の場として予定していた会場には、会見席の背後のパネルに、「G8 Finance Ministers' Meeting」と大きく書かれていることが判明。気候変動共同記者会見は、日米英と世銀で、その後のサミット財務大臣会合で議論し、その他G8諸国の支持を求めていく気候変動基金の重要性を訴えていくというものであったため、「G8 Finance Ministers' Meeting」のパネルの前で行うのは適当ではないことから、何とかそれをカバーする方法を模索した。

パネル自体は、固定されていて動かせないことから、屏風（ステージが狭すぎて駄目）、観葉植物（小さすぎて駄目）、天井からの間仕切り（位置がズレていて駄目）と様々な方法を試して、結局パネル上の文字を見えにくくするためにパネルに黒い布をかけ、その上から更に白布をかけるということに落ち着いた。午前3時の事である。

なお、警察からの要請もあり、11日（水）夕方から立入制限を行うとともに、金属探知機6台・エックス線検査機4台を稼動し、多数の警備員を配しての厳重な警備を実施した。

金属探知機による手荷物検査（プレス向け）

(4) ホテル

我が国を含め、全参加国・機関の代表団がリーガロイヤルホテルに宿泊した。当ホテルは、地元歓迎レセプションの会場であるとともに、本会合会場である国際会議場に隣接しており、渡り廊下によって雨でも濡れずに移動できることから、ロジスティックスの観点から極めて便利であった。また、これまで皇室の方々や外国の要人を多く迎えてきた歴史があり、厳重な警備にも慣れていることから、警察との様々な調整もスムーズであったと思う。なお、リーガロイヤルホテル側も、参加国・機関毎に担当者を

各国代表団へのIDバッジ受け渡し

配置し、当方リエゾンとも協力しつつ、ホテル内での誘導や宿泊に係る諸手続きに当たった。

6階扇・末広の2部屋を借り上げ、リエゾン等のロジ部隊の本拠地とするとともに、各国代表団へのIDカードや車両証の発給を行った。

(5) 空港

会場が大阪ということもあり、参加者の大部分は関西国際空港を利用した。要人（VIP）の利用が多い成田空港に比較すると、関空はVIP対応にあまり慣れていない面もあるようだったが、警察当局から、本年に複数開催されるサミット閣僚会合の中でも、財務大臣会合は外務大臣会合と並び準首脳級の警備を行うこととされたことから、今回の空港オペレーションは総じて複雑・大掛かりなものとなった。

具体的には、4月頃、財務省関税局・法務省入国管理局等の空港CIQ（Customs税関、Immigration出入国管理、Quarantine検疫）当局により、サミット閣僚会合関係省庁担当者に対して、会合時における各国代表団に対する便宜供与手続き等の説明が行われた。引き続き、財務官室による関空の実際の下見を随時行い、関西国際空港株式会社（KIAC）、大阪税関関西空港税関支署（税関）、大阪入国管理局関西空港支局（入管）、及び警察当局等と各国VIPの出入国動線の下見・検討を行った。

当初は、空港内のウィングシャトル（離発着ゲートとターミナルビル間を結ぶ空港内電車）を利用してバスラウンジまで移動した上で、通関・検疫・出入国手続きを代理で行って出入国を行う案を検討していたが、警察当局からの強い要請により、各国VIPの安全確保を最優先した、機側から直接車輌に乗り込む「機側交通」案を採用するに至った。

本オペレーションにおいて、要警護対象者であるG8及びアウトリーチ国の大臣は、入国時においては、①搭乗機から降機したらすぐボーディングブリッジ付属の階段にて地面に降り、②車輌に乗り込んだら警察車輌の先導の下に大阪市内に向けて出発、出国時においてはその全く逆の動線となった。このような例外的な出入国動線のため、警察との調整、KIAC等への必要な書類の提出、代理出入国手続き等の便宜供与依頼の発出、国土交通省航空局・各航空会社への根回し、空港関係者への累次にわたる説明会、各国への事前の周知徹底、等の事務作業が発生し、また直前まで参加者及びフライトの変更が相次いだため、受入体制の整備で繁忙を極めた。加えて、米・伊・仏は商用機ではなく政府専用機や特別機を利用したため、それへの対応も必要であった。

当日は、財務本省からは担当者が1名駐在したのみであったが、各国大臣一行の入出国にあたっては大阪税関の職員による送迎チームがアテンドを担当、これら送迎チームやKIAC職員、リエゾン等のスタッフが機動的・柔軟に対応してくれたおかげで、大きなトラブルもなく終えることができた。

(6) 登録（レジストレーション）

参加の登録（レジストレーション）は、パスワード等を個別にメールで伝達した上で、原則オフィシャルWEBサイト上で各国・機関に行ってもらった。その結果、事務局で登録データの管理・編集を少ないエネルギーで容易に行えたことは非常に便利であった。

他方、事務方が大阪入りしてからの追加登録も幾つかあった。しかしながら、現地での各国へのIDバッジ受け渡し自体は、事前にリエゾ

ン等を通じて登録情報を確認し、ピックアップ日時の調整等を各国と行っていたので、スムーズに行われたと思われる。

(7) 車輌

車輌については、参加国の大臣及び次官に対し、事務局から1台ずつの車輌（セダン）提供を行った。本提供車輌を含めて、各国が利用する車輌には会合用の車輌証を事務局から発行し、各会場には本車輌証がないと入場できないようにすることで、安全の確保に努めた。また、VIP車輌には警察車輌の先導をつけるとのことであったため、リエゾン等を通じて事前におおよその各国車輌の運行計画を聴取・収集を行った。

ほとんど全ての国・機関が事務局提供車輌を活用しており、特に総領事館等大阪に拠点がない国・機関にとっては、事務局提供車輌は大いに役立ったようである。他方で、使用可能エリアを大阪府内に限定したり、要警護対象のVIPについては助手席に常に日本の警護官を乗車させた点については、一部の参加国から使いにくいとのコメントが寄せられた。

なお、各国・事務局用車輌とも、車輌の管理（運行計画の取りまとめ、車輌会社への連絡、警察・空港への連絡・調整等）については、近畿財務局総務部総務課を主体とする輸送本部（リーガロイヤルホテル・ロジ室内に設置）が基本的に担当した。輸送本部が機動的・効率的な運営を行ってくれたおかげで、車輌手配については大きな混乱はなくスムーズに行われた。

輸送本部での配車の様子

6. おわりに

終わってみれば、あっという間の2日間であったが、会議の成果は、洞爺湖での首脳宣言にも反映され、財務大臣会合は、その役割を果たしたと言える。

各国大臣達については、長旅と時差に堪えての参加と相成った訳であるが、会議後、様々なレベルで、各国より会議の準備について、御礼の言葉が寄せられており、各国とも短い時間ではあったものの、大阪滞在を楽しんで頂けたのではないかと思う。

これもひとえに、広報関係を含め、地元大阪、警察当局、関空、その他大勢の皆様の御助力の賜物であり、改めてお礼を申し上げて、本稿を終えることとしたい。